



概要報告 8

# 市道鈴鹿楠線改良工事に伴う

## 埋蔵文化財調査概要報告

1985・11

鈴鹿市遺跡調査会

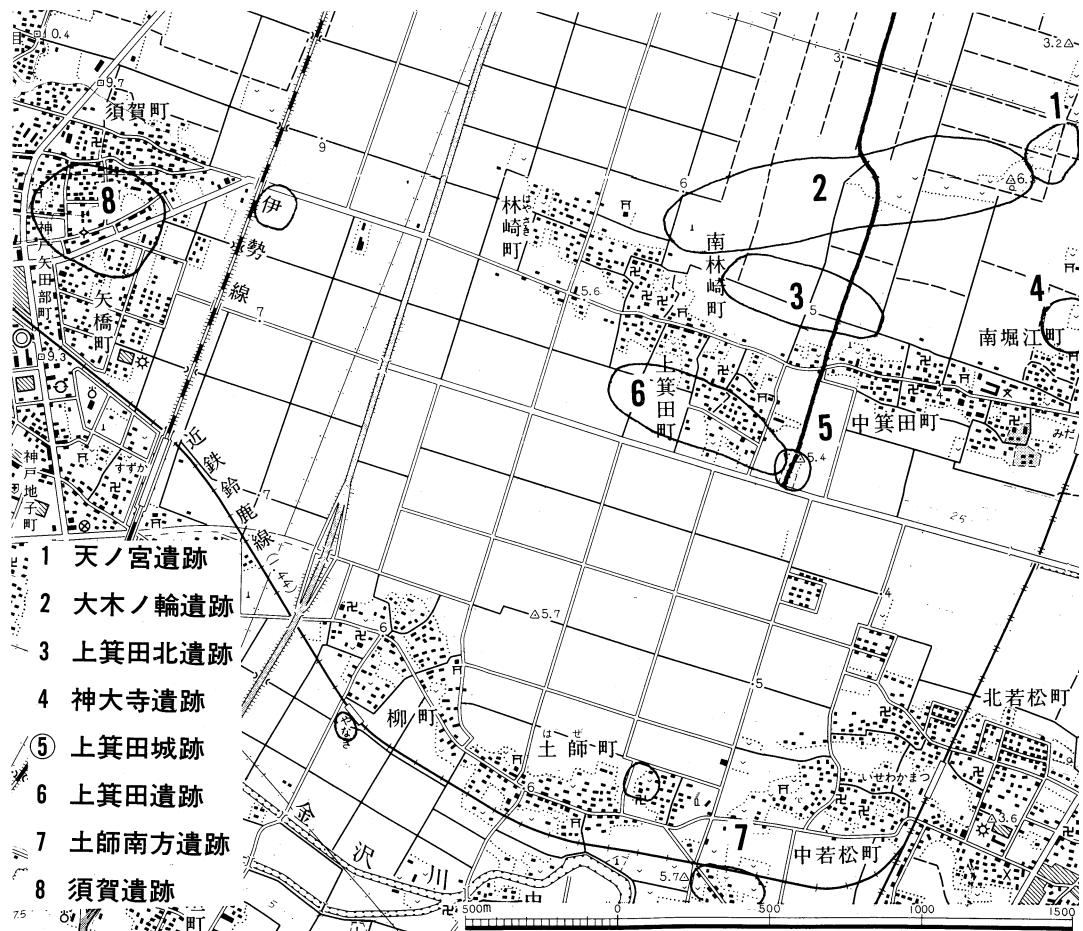
## 1.はじめに

市道鈴鹿楠線は、ちょうど国道23号線と近畿日本鉄道名古屋線との間を併行して、三重郡楠町から鈴鹿市北長太町を経て、上箕田町に至る約3kmの区間である。

この道路改良工事計画内には、周知遺跡(遺跡台帳に登録済みの遺跡)の大木ノ輪遺跡・上箕田城跡・上箕田遺跡等が所在するため、文化財保護法の規定に基づいて、事業担当課である土木課と遺跡の取り扱いについて協議し、その結果、本年度事業に係る上箕田城跡について、工事着手前に発掘調査を実施し、地下遺構の埋設状況を明らかにすることになった。

調査にあたり、その手続きとして、事業主体である鈴鹿市は、文化財保護法第57条第3項の規定により、昭和60年7月10日付、鈴土第2,621号をもって、文化庁へ発掘調査に係る通知書を、調査主体の鈴鹿市教育委員会(遺跡調査会)は、文化財保護法第57条第1項により、昭和60年7月15日付で、文化庁へ発掘届出書を提出した。

調査は、鈴鹿市遺跡調査会(代表、鈴鹿市教育委員会教育長神尾博)が鈴鹿市(鈴鹿市長野村仲三郎)と委託契約を締結し、昭和60年8月1日から18日まで(実働8日間)、地元の方々の協力を得て調査を実施した。



上箕田城跡の位置及び周辺の遺跡 (1:25,000 鈴鹿)

## 2. 位置と歴史環境

伊勢湾に東流する鈴鹿川は、下流でいくども流路を変え、肥沃な平野を形成してきた。この沖積平野は、鈴鹿市の穀倉地帯でもあり、古くから開発が進み海岸線に沿って条里制が施行されたところでもある。

弥生時代以後の古代集落は、河川の氾濫と闘いながら、鈴鹿川旧河床の自然堤防止の微高地に営なまれている。海拔 4m～5m の高さである。

上箕田城は、室町時代伊勢守護土岐持頼が築いたと言われ、その子政康は応仁の乱において、東軍に属し、西軍の義視の上洛を妨げた理由により、応仁二年（1468）、国司軍北畠教具に攻められ滅んでいる。

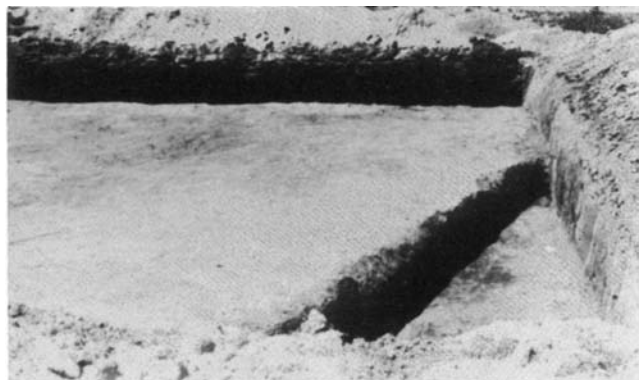
その位置は、上箕田町の集落から南東約 100m、通称大塚山と呼ばれ、周囲の水田より約』・1m 程高く、50m × 120m の細長い畑地と推定されている。現況は、畑地の他、一部墓地となり、周辺には土器片の散布が認められる。

当城跡から直ぐ東方には、人物が鹿を射る線刻画の描かれた壺が出土したことで著名な弥生時代の大遺跡、上箕田遺跡（6）があり、その北には、県天然記念物「長太の大樟<sup>なご おおくす</sup>」を中心に南西に広がる弥生時代から鎌倉時代の古代集落、大木ノ輪遺跡（2）がある。また、この周辺には、昭和 55 年県営圃場整備事業に伴い調査された天ノ宮遺跡（1）、神大寺遺跡（4）等の古代集落址もある。

## 3. 調査の方法及び調査結果

道路敷地に係る範囲内に、2 箇所の試掘坑を設定した。南より No.1、2 と呼称し、表土・除去より開始した。No.1 の層位は、Ⅲ層に大別され、耕作土の第Ⅰ層（巾 10cm～15cm）と黒褐色土のⅡ層（巾 30cm～40cm）からは、弥生時代から平安・鎌倉時代土器片が少量出土している。砂質性の黒褐色土の第Ⅲ層（巾 30cm～35cm）には遺物は全く含まれず、以下黄褐色の砂層に続いている。北東隅では、Ⅲ層を約 40cm 程切り込んで、落ち込みがあり、その埋土は、若干砂礫を含む灰褐色土でやや堅く、山茶碗片が数片出土した。また、その落ち込みは、東端で更に 40cm～50cm 深くなり、最深部は表土から約 1m20～30cm に当る。恐らく、耕地整理される以前の旧地形と考えられる。

No.2 もⅢ層に分けられ、Ⅰ・Ⅱ層は No.1 と同様である。Ⅲ層は、No.1 の北東隅部にみられた灰褐色の埋土（巾 20cm～30cm）が続いている。それ以下は、黄褐色の砂層である。山茶碗片が数点出土したのみで、柱穴等の遺構は検出されなかった。



（試掘坑 No.1、北東より）

#### 4. 出土遺物

出土遺物には、弥生時代から平安・鎌倉時代の土器片があるが、量的に少なく、かつ細片で図化できるものは少ない。

##### ○弥生式土器（1～5）

(1) 壺型土器の底部で、底に木葉紋が残る。器壁が 1.4cm と厚く、砂粒が多い。同じものが上箕田遺跡からも出土している。

(2) 壺型土器の口頸部にあたるところで、横に二条の沈線が巡る。色調は灰褐色で、器壁は 5mm。

(3) ゆるやかなカーブを持つ壺型土器の胴部で、上部に四条の沈線が巡る・色調は灰褐色。

(4) ゆるやかに外傾する壺型土器の口頸部にあたる部分で、細い貼付の突帯が二条ありその上に細かい刻み目を施す。器壁は 5mm で色調は赤褐色。

(5) 太さの異なる貼付の突帯があり、その上に刻み目を施す。器壁は 1.1cm と厚い。

##### ○灰釉陶器（6・7）

(6) 口径約 13.4cm の碗で、口縁端部はヨコナデにより細く、体部の上位に黄灰色の釉がかかる。

(7) 口頸部の径が約 9.8cm の長頸壺で、黄灰色の釉が薄くかかる。

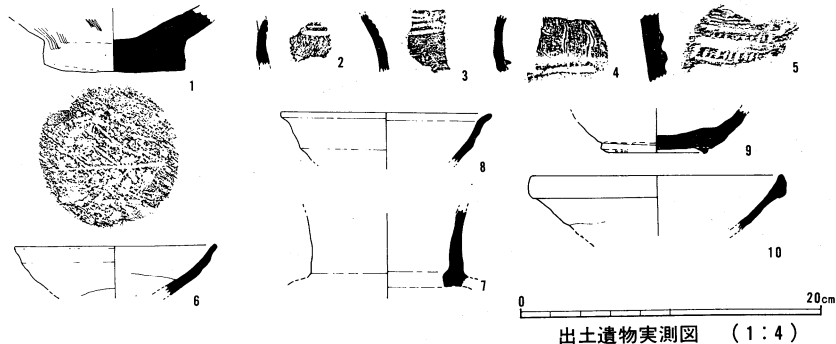
##### ○山茶碗（8・9）

(8) 口径約 14cm の碗で、口縁端部がわずかに外反する。色調は灰褐色で胎土に砂粒を多く含む。

(9) 山茶碗の底部で、底い高台が取り付き、「モミ」の圧痕が残る。

##### ○白磁碗

(10) 口径約 16.8cm の中国から請来した白磁の碗。口縁端部は肥厚し、稜をつくる。上位のみに乳白色の釉がかかる。



#### 5. ま と め

試掘坑 No.1 の北東隅から検出された落ち込みの埋土は、灰褐色で、南側の土層とは明らかに異なっている。しかし、山茶碗の小片が少量出土したことにとどまり、柱穴等の遺構は検出されず、上箕田城跡との直接の関連は明確に出来なかった。